

1999年4月

## ベトナムの近代化について

講演者： ホーチミン日本商工会  
第2代～第4代会長 伊東 淳一

今日は皆さんに「ベトナムの近代化」というテーマでお話させていただきたいと思います。

「近代化」という言葉の定義をまじめに考えますと大変難しいのでここでは、「社会主義市場経済」というベトナムにとっては新しい国の仕組み作りを行っている、そのことを「ベトナムの近代化」と呼び、「ベトナムが近代化を果たす上でどんな問題を抱えているのか？」といったことを中心にお話したいと思います。

私ども商社は貿易や投資といったビジネスの限られた場で限られたベトナム人やベトナムの企業との付き合いですから「ベトナムの近代化」と申しまして大変せまい視野でのお話しです。あえて申し上げますならシロウトの強みと言いましょるか想像、推測で大胆にベトナムという国の切り口が語れるという程度のことと受けとめてください。

### <ベトナム経済の歴史>

ベトナムの歴史を経済的な視点で振り返ってみます。

「ベトナム戦争」に代表されますようにベトナムは常に戦争や紛争に巻き込まれておりました。カンボジアから撤兵しましたのが1989年です。それまでは非常時の状態にありました。ベトナム人がベトナム人の手で本格的な経済運営を平時で行うことができたというのはほんの10年前のことです。

経済の歴史を乱暴に分けますと最初に「植民地経済」、ついで「戦争経済」そして1975年にベトナムが統一されてからは「中央計画経済」となるわけです。その間、多少の濃淡はあっても常に「外国からの援助に支えられた経済」（援助経済）でありました。75年南北が統一された後になってからもベトナム政府は年末になるとモスクワを訪問し翌年の予算内容の説明を行って不足分をソ連政府からの援助で補っていたといわれています。

1986年に「ドイモイ政策」が打ち出されましたので1986年から「市場経済」を推し進めてきたように考えられる方がいらっしゃいます。しかし「ドイモイ政策」が我々のイメージする「市場経済」を標榜した政策なのかどうかきわめて怪しいと思います。

「ドイモイ政策」のなかで市場経済らしきことをいっているのは次の二点くらいでしょう。一つは西側諸国と仲良くしようということ。二つ目は私的な商業活動を認めるといっている点です。しかしベトナム政府がドイモイ政策を推し進める中でどのような市場経済を目指しているのかその全体像は未だに私にはよくわかりません。そして大事なポイントは「ドイモイ政策」は国民に対して「金持ちになって良い」という明確なメッセージを含んでいなかったということです。

1991年、ソ連はベトナムに対して、ベトナムが戦略品目と呼んでいた「原綿」「肥料」「石油製品」「鉄鋼製品」の4つの製品をハード・カレンシーつまり米国ドルで支払って欲しいと要求してきました。この申し入れはベトナムにとって大変ショックでした。ベトナムが思っていた以上にソ連の経済が悪化していたということ、そしてこれまで頼りにしていたコメコン体制は崩壊、ソ連・東欧諸国からの援助は期待できなくなったことを、ベトナムはこの時初めて肌身で感じ取りました。

そこからベトナムはドイモイ政策の一つである西側諸国との経済交流を「口先だけではなく」本格的に始めざるを得ませんでした。日本政府がODAを再開したのも翌年の92年からです。

こうしてみていますと

- 1) 「ドイモイ政策」を本格的に始めたのはソ連・東欧が崩壊した翌年の92年以降。
- 2) 「ドイモイ政策」は理論武装された「市場経済」とは呼べない。といえるのではないかと思います。

ベトナムが市場経済へ移行するための本格的な経済構造改革を開始したのが92年からだとすると今年1999年は7年目となります。その間ベトナム政府は試行錯誤を繰り返しながら「ベトナム式の社会主義市場経済」は何かを模索してきました。

それは我々外国人が思っているほど簡単なことではないように思えます。それはベトナムが様々な歴史の後遺症を抱えておりそれらの後遺症を癒してからでないと本格的な構造改革には着手できないという事情があるからだと思います。日本でも例えば「お米の問題」には社会的、歴史的そして政治的にも一筋縄では解決できない問題が内蔵されております。又、米国から様々な分野で規制緩和をすべきだと圧力をかけられますが日本には日本のお家の事情がありまして米国人が考えるように簡単ではありません。それと同じ性質の問題は日本に限らずベトナムにも中国にもほとんどすべての国でその国特有の歴史の後遺症といったものを抱えております。

それではベトナムが抱えている「歴史の後遺症とは何か」についてお話したいと思います。

#### <ベトナムが抱える歴史の後遺症>

今から10年前の1989年にベトナムの要人が日本をお忍びで訪問されました。その方と夕食会をもちました。典型的な日本の庶民料理を食べたいとおっしゃるので「焼き鳥屋」さんにおつれしました。庶民的な雰囲気と食べなれた焼き鳥それに米で出来た「お酒」の組み合わせが良かったのでしょうか、大変ご機嫌になられて「ベトナムは過去に大きな誤りを三つ犯した」と言い出しました。そのかたのおっしゃった事をそのまま申し上げますと

- ①一つ目の誤りは「ソ連型の中央計画経済を採用したこと」あれは大きな間違いであった。中央計画経済で経済発展した国はない。
- ②二つ目の誤りはカンボジアに侵攻したこと。あれをやってしまったために西側諸国から経済封鎖を受けて西側との経済交流が絶たれてしまった。日本からの経済援助も止まってしまった。政治的には多少の意義は合ったかもしれない。しかし10年もカンボジアに兵をとどめる必要はなかった。
- ③三つ目はアメリカとの戦争。あの戦争はせいぜい引き分けにとどめておくべきだった。

私は大変驚きました。とくに三つ目の対米戦争を引き分けにしておくべきだったというくだりについては、それまでのベトナム観を一変させるほど驚きました。

その後ベトナムの仕事から一時離れましたので、この三つの誤りのことについてはすっかり忘れていました。1993年1月にホーチミンに赴任し当地で暮らすようになってから三つの誤り、その中でも三番目の対米戦争の部分をどのように解釈したら良いのかいろいろ考えてまいりました。駐在2年目を迎えた頃からでしょうか漸くその意味するところをおぼろげながら感じてまいりました。

それは日本と逆のことを考えれば分かりやすいということに気がつきました。日本は対米戦争に負けました。もし勝っていたら「神国日本」「八紘一宇」「神風」といった言葉に集約される古い価値観で政治・経済は動かされていたでしょう。我々は負けましたからその様な日本の古い価値観をもの見事に断ち切ることができました。そのことによって我々は米国流の合理主義、自由主義といった新しい価値観を容易に受け入れることが出来たと思うのです。しかも米国の大きな軍事力に支えられた安全保障体制のもとで経済活動に専念できた、これが日本を今日の世界経済大国をもたらした一つの側面であったと思うのです。

しかしベトナムは対米戦争に勝ちました。したがって当然のことながら勝者の論理が幅を利かすこととなります。勝者の奢りといったこともでてきます。「明日にも理想の共産主義国家ができる。」と思いつんで急速な共産化を推し進めてもおかしくありません。しかしその結果は200万人という難民を生み出すほど経済が疲弊しました。社会的には「解放してあげた側の人間（勝ち組み）」と「解放していただいた側の人間（負け組み）」そして国から逃れた越僑の三つのグループを生み出し、複雑な社会心理構造を作り上げてしまいました。それでも「解放してあげた側」の勝ち組みが多少とも経済的に恩恵を受けていれば話しはまだ簡単なのでしょうが、どうもここにきてみると「解放していただいた側（負け組み）」の人間の方が豊かな暮らしをしている、いわゆる南北問題が浮上してきました。この南北問題の象徴的な出来事が1993年に起きております。

1993年2月にホーチミン市で世界中からベトナム人（越僑）が集まって「Overseas Vietnamese Association」の世界大会が開催されました。時のベトナム首相であるヴォー・ヴァン・キエット氏が主賓としては呼ばれ演説を行っております。彼は参加者に向かって「ベトナム政府は過去を忘れる。解放してあげた側も解放していただいた側も区別はない。ベトナム政府としてはあなたがたがもっている技術、経験そしてお金を必要としている。どうかベトナムに戻ってきて再建ベトナムに加わって欲しい」と演説しております。そしてその年の秋の党機関紙に同様の趣旨の論文を掲載しました。ところが当時の大統領レー・ドック・アインはこの首相の発言に対して猛烈に反発しました。「我々解放してあげた側は今日のベトナムの自由と独立と平和を勝ち取るために300万人の尊い犠牲を払っている。解放していただいた側の人々と解放してあげた側の人々に差をつけて何故いけないのか。今でも夫を亡くした不幸な戦争未亡人が6万もいる。我々政府は彼女たちにいったい何をしてあげたのか。」と首相に嘯み付けております。

それに対して首相は「解放後の最初の党大会（1976年）で我々は過去を忘れると皆で決めたはず。それを20年経った今、同じ事をいってどこが悪い」と激しく反論しました。私はこの論争の話聞いてベトナム人の心の奥底に横たわる南北間の深くて広い溝の大きさを感じざるを得ませんでした。

大きな誤りの中でも最初の二つ、中央計画経済とカンボジア侵攻の後遺症はさほど大きいとは思いません。多少の時間とエネルギーは必要ですが取り戻すことはさほど難しいとは思えません。しかしながら三つ目の対米戦争に勝ったことによる後遺症は人間の人生観や価値観にも触れる根深い問題が内在しております。国は人間と同じように表面的な形（制度）を変えることはそれほど難しいことだとは思いません。しかし国民を支える精神というものは人間の性格を変えること以上になかなか容易な事ではありません。

### <現代のベトナムが抱える4つの問題点>

それではベトナムはかかる後遺症を抱えながら現在どのような問題に直面しているのかについてお話したいと思います。

今から6年ほど前の1993年7月の国会で当時の第一副首相のファン・バン・カイ氏が首相代行として政府施政演説を行っております。演説の前半はベトナムの経済があらゆる分野で発展していることを強調していますが後半の部分で「ベトナムが抱える問題」について「確かに我が国は経済的に大きく飛躍しようとしている。しかし必ずしも問題がないわけではない。少なくともここにいる550名（当時）の国会議員の皆さんは我が国が直面する4つの問題点を正確に理解してもらいたい」と前置きして次のような事を述べています。

1) 一つは国の財政状態。

「皆さんが考えているほど国に金がない。あれもやりたいこれもやりたいと各省庁は案件を次から次と作り上げるが私たちには十分なお金がないことを良く認識して欲しい。納めるべきお金はまずさきにきちんと納め、又、国の大切な資産を無駄使いしないでほしい」

2) 二つ目は外国投資・外国援助。

「皆さんが思っておられるほど外国投資も外国援助もきていない。外国投資では認可を受けた案件の30%ほどしか実行されていない。あとは権利をとってじっとしているか取りやめている。外国援助も実行率は極めて悪い。我々はもっともっと努力して外国投資が増えていく環境をつくり、そして外国援助の実行率をあげる工夫をしなければならない」

3) 三つ目は行政改革について

「役所の数が多く役人の数が多すぎる、そのうえ我々はあまりにも官僚的である。全てのことに時間がかかりすぎる。それに役人の汚職がはなはだしい。これらの問題は放置しておけば我が国の経済発展に大きなマイナスのインパクトを与えかねない」

4) 四つ目は社会問題についてですが三つあります。

一つは失業です。3000万人（当時）の労働人口の内20%は完全失業の状態である。それよりももっと恐いのは15歳以上の若年労働者が毎年毎年100万人近く労働市場に流れ込んでくる。この若い労働者の受け皿をつくるのが我々国会議員の大事な仕事であることを認識して欲しい。

二つ目は密輸の問題。

密輸が止まらない。これを放置しておくとも国内産業が育たない。経済発展を考えると無視できない重要な問題である。

三つ目は「裏のビジネス」が盛んになりつつある。麻薬、売春、エイズ問題を解決しなければ我が国の経済発展を阻害する。

私はこの内容を英字新聞で読みまして、ベトナムが直面する大きな問題点をこれほどまでに正確にかつ簡潔にまとめ、直視できるベトナム人に驚きを超えて感動すら覚えました。ところでこの大きな4つの問題点は解決されたのでしょうか？

残念ながら93年から今日の99年4月までの間では何一つ解決されておられません。ここにベトナムの抱える問題の根深さを感じざるをえません。

### <ベトナムの抱える4つの課題>

ベトナムは三つの「歴史の後遺症」を引きずりながら4つの大きな問題に直面しているわけですが、それではそれらを克服するにはどうしたら良いのでしょうか？

これから「ベトナムの4つの課題」についてお話したいと思います。

5年ほど前の1994年10月に共産党の相当地位の高いある方とお話する機会がありました。今でも現役でいらっしゃるのですがお名前は差し控えさせていただきますが、その方がベトナムの課題について大変興味深い話をされました。思い出す限り忠実にここで再現してみます。

「日本は素晴らしい国だと思います。日本が世界の経済大国として発展した秘密は二つあると私は考えています。

一つは明治維新です。日本人は日本の旧いが、しかし伝統的な良い価値観をしっかりと守りながら新しい西洋のシステムを大胆に取り入れていった。この日本民族の優秀な性質が今日の経済的な繁栄をもたらした大きな要因の一つだと思います。

二つ目は戦後復興に果たしたMITIの役割ではないかと思っています。とくにいくつかの戦後復興政策の中でも有沢広巳さんが提唱した「傾斜生産」を思い切って実行したことで日本は戦後の荒廃から立ち直ったと理解しています。私たちは逆なことをやってきました。私たちはすべての産業が大事だと言って乏しい財源から小出しに予算をばらまいてきました。その結果はご承知の通り、どの産業も疲弊してしまい何も結実しませんでした。砂に水が染みるごとく何もこのまま今日を迎えてしまいました。

私はベトナムの課題としては二つあると思っています。

一つはドイモイ政策に代わる新しい政策を早急に打ち出すべきだと思っています。しっかりと理論武装された「ベトナム式の社会主義市場経済とはなにか」を早急に作り上げきちんと国民に分かりやすく説明することです。つまり国民に対して「国民が金持ちになることを国は妨げない。そして金持ちの金をこれから金持ちになろうとする人々つまり貧乏人に、分け与えると元の共産主義に戻ってしまうので、分け与えない。お金が金持ちから貧乏人の間をぐるぐる回りながら自然と膨らんでいくそういった仕組みを国が作りあげ後は国民に任せる」とはっきり言うべきだと考えています。

私たちは共産党の中央レベルや国会でいまこの議論を真剣にやっているところです。  
(1994年時点の話です)

二つ目は産業政策をしっかりと打ち出すべきです。先行して発展する産業としばらく発展が遅れるのを我慢してもらい産業を区別し乏しい財源を必要な産業に集中投資すべきです。それをやらねば先に述べたような過去の過ちの繰り返しに終わってしまう。

私はこの話を聞き終えてまたまた驚いてしまいました。ベトナム人の口からそれも共産党の中核におられる方から「明治維新」、「傾斜生産」という言葉や有沢広巳さんと言った個人の名前を聞いたのも驚きましたし、ドイモイ政策や共産主義そのものを否定するような発言にも驚きました。又、これまで国民が金持ちになることを国は妨げてきたことを逆説的に認める発言には飛び上がる思いでした。

このかたの発言内容について多少の解説が必要かと思っています。

彼が明治維新のくだりで言いたかったことは、ベトナムにとっての旧いがしかし伝統的な良い価値観とは「マルクス・レーニン主義でありホーチミンの教え」であり、この良い部分は残しながら資本主義経済の良い仕組みだけをうまく取り入れたいという事だと思

います。

産業政策について申し上げますとベトナムは「重工業政策をもう一度復活させてそれを機関車にして経済を引っ張り上げる政策」が良いのか、「繊維や靴といった雑貨類を安い工賃でつくり輸出する軽工業」に力を入れたら良いのか、それとも「人口の70%を占める農村をまず豊かにして時間はかかっても徐々に経済発展をねらう農業政策」に重点を置いたら良いのか決める必要があると言いたかったと思います。この産業政策については98年初頭の国会では農業に力を入れると表明しましたから方向は定まってきているようですが、政府部内では手っ取り早く経済発展の成果を内外に表現できる「重工業政策」に未練を持つ人が多くいらっしやるので簡単には方向転換できないと私は思います。

余談になりますが、このようなお話を通産省のある方に申し上げましたところ「傾斜生産をMITIが積極的に推し進めたくだけは少し違います。実はMITIは反対したのですが当時の吉田首相と有沢さんとが意気投合して強引に推し進めたのです。そのへんの事情は大塚和男さん（高名な経済学者であった大塚久雄さんのご子息）が戦後のMITIを総括した論文のなかで詳しく書いています」と事実関係の訂正を受けました。又、英文の論文をお送りいただき、そして上記の発言をされたベトナムの要人のかたにお送りしました。

さてこれまでのお話でお分かりのように

ベトナムの一つ目の課題は「ベトナム式社会主義市場経済を明確に打ち出すこと」だと思います。1998年に行われた第10回の共産党大会でそれらしきことを採択し発表しておりますがその表現は「ベトナムの法の下で合法的に金持ちになることは許される」という言い回しになっております。必ずしも国民にとって分かりやすい表現とは申せません。加えて「ドイモイ政策は正しかった今後もドイモイを続ける」と付け加えております。中国の鄧小平は「白い猫も黒い猫もねずみをいっぱい捕る猫は良い猫ではないか」という単純明快なセリフで守旧派の反対を押し切りました。そして中国の社会が大きく転換しました。ベトナム共産党大会決議事項のように「法の下で合法的に金持ちになってよい」と言われても庶民にとっては法律の子細を知っているわけでもなく、「それは非合法」だとしても国から突然いわれたらそれでお終いではないかと思わざるを得ません。加えて「ドイモイ政策は正しかった今後も続ける」となれば実は何も変わらない、勝手な解釈で思い切ったことをするにはまだまだ早いと感じるのも当然かもしれません。

二つ目の課題は「産業政策」だと思います。ベトナムには農業・水産業と石炭・原油といった鉱業を除けばほとんど何もないと言って良いくらいの悲惨な状況となっております。しかし見方を変えれば、中央計画経済をやってきた社会主義国の特徴なのでしょうか、この国の産業構造は一気通貫ですべてあるとも言えます。セメント、精油工場、ガラス、ゴム、紙、肥料等など一応作れることにはなっています。しかし実態は60年代、70年代、ひどいになると中には50年代の古い技術で作られた小規模な設備機械をこれまでの数十年間だましまし使ってきました。度重なる故障で取りかえる部品もないため生産能力は極端に落ちており加えて当然の事ながら生産効率が非常に低いといった代物ばかりです。その意味でこの国にはこれといった産業はないと言えます。しかもこれらの工場はほとんどが国営企業として運営されています。したがって先ほど申し上げたメリハリの利いた「産業政策」を打ち出すと言うことはイコール切り捨てる国営企業を選び出す作業と同一となってしまいます。理想の共産主義を追い求めてきたベトナム政府そして共産党としては労働者（国民）の職を奪ってしまうような合理化案は打ち出せないといった悩ましい問題が内在しています。自然発生的に市場が生まれるには程遠い現状と言わざるを得ません。国として産業政策を打ち出して、例えば意識的に特定産業を育成し産業復興の呼び水とするなどの策を打ち出さねばならないと思います。ベトナムが目指す社会主義市場経済に見合った産業構造再編をどうするのかを真剣に考え実行しなければ国民の経済活動を活発化

することは出来ません。その産業構造再編のなかでも最も大事なことは「商業資本の育成」と「証券市場を含む金融システム」の構築の二つであると思っております。そこにはベトナムの歴史、社会、宗教、国民性といったあらゆる要素を加味したベトナム独自の市場経済の仕組み作りに多いに関係しております。長い時間をかけてワインが熟成するように出来上がっていくのですが、最初の仕込みでどのような器にどのような葡萄を選んでほうり込むかという今が将来を占う最も大事な初期段階にあると思えます。

いずれにせよ国民に自由な経済活動が出来るような舞台（市場）を提供するまでベトナム政府の果たす役割は非常に大きいと思えます。

さてここまではすべてベトナム人から聞いたことをそのまま申し上げておりますのでそろそろ私の考えたベトナムの課題をお話ししたいと思います。

三つ目の課題は国際社会にはやく組み入れられることです。私はこの話を1994年からしておりまして当時はアセアンに早く加盟するべきだと申し上げてきました。何故ならばベトナムは自分達の手だけでは国を改革できなかつたり外圧を必要とする「歴史の後遺症」を抱えているからです。冒頭に申し上げました三つ目の誤りがそれにあたります。つまり1975年の南北統一は北の政権に大なる自信を持たせました。過大な自信と言って良いかもしれません。しかしながら結果的には200万人という難民を出してしまうほど経済政策は失敗してしまいました。これはベトナム人自身も否定できない事実であります。一方、ベトナムが市場経済を導入するならば彼らが過去20数年間やってきたことと180度違ったことをやらねばなりません。20数年間信じてやってきたことを自ら否定するほどむなしくつらいことはありません。しかしながらアセアンに加盟した場合、ベトナムはアセアン諸国と歩調を合わせていかなければなりません。国民に対しては「アセアンのルールに従って我々も変わらなければならない」という単純明快な説明ができます。これがベトナムにとってアセアン加盟の最大の目的だったと言ってよいと思えます。勿論外向的にはアジアの超大国で歴史的にもベトナムにとっては長年の潜在的な脅威である中国政策の一環ではありますが、どうも本音は外圧を受けながら国を変えたかったところにあるような気がしてなりません。しかしアセアン加盟だけでは不十分でありましてやはりWTOとかいくつもの国際機関に加盟する必要がありベトナム側も努力を重ねているところです。しかし国際社会に認められるためにはもっと大事な課題があります。

それが4つめの課題であるアメリカとの国交回復、貿易協定、最恵国待遇といった一連の対米終戦処理問題です。先日アメリカの西海岸ロスアンジェルスでホーチミンさんの写真をめぐってベトナム人同士の紛争が起きていました。まだまだ一部のアメリカ人と一部のベトナム人の中には根深い感情のしこりが残っていることを改めて思い起こさせた事件でした。しかし両国ともこれまでかなりまじめに関係修復に務めてきたように思えます。事実私たちが想像した以上に早いテンポで国交回復も行われました。現在は貿易協定の交渉を行っております。両国ともに真剣にまとめようと努力している様子なので早晩良いニュースが聞けるのでは、そして最恵国待遇もあわせて供与されるのではないかと期待しているところです。

この一連の交渉がまとまると言うことは単に経済的な出来事ではなく、それ以上に「ベトナム戦争」と呼ばれた歴史の一ページに幕が下ろされるということであり又ベトナムにとってはこれまでの長い長い戦争の歴史に終止符を打つことが出来たと言う歴史的な意義も内臓されていると思えます。

私はこれら四つの課題をすべて解決することによってベトナムは市場経済に向けて第一歩

を踏み出すことが出来ると考えております。今はその準備段階にあります。そしてもう少しで準備が終わるのではと期待しているところです。

### <三つの亡霊>

ところで、4つの課題を申し上げましたが面白いことに3番目の国際社会へ参入と4番目の課題の対米問題は不十分ながらもかなり早いテンポで解決に向けて進んでいます。私は当初このお話を始めた1994年ごろはむしろ3番目と4番目は相手がある話でもありベトナムがいくら熱心であったところで相手がその気にならなければ無理ですから相当時間がかかるのではないかと想像していましたが結果は逆でした。自分自身で解決しなければならない課題の方が難しいということがわかりました。それは多分ベトナムにはこれから申し上げます三つの亡霊が住みついておりそれに悩まされているためかと思うのです。

一つは植民地の経験という亡霊です。どういう事かと申しますと長い間植民地とされていたためにベトナム人は外国人に対して恐怖に近い警戒心を常に持ちつづけているように思えます。外国人の言うことはまともには信用しません。彼らにとって外国人は常にベトナム人を利用して金もうけをし本国に全て持ち帰る人々です。甘い言葉でいろいろ忠告や提言をしますがしかしその裏には必ず外国人にとって良い結果が生まれるように巧妙に仕組んであると考えます。外国人の話を一応は聞きます。しかし必ず自己流に跡形もなく変形して自分達の流儀でやってしまいます。外国人は「ベトナムのために骨を埋めるわけでもなくましてや血をながすことはしない」わけですから当然と言えば当然のことです。しかしこれはどの国の国民も多少はもっている亡霊ですからベトナム人だけと言うことではありません。しかし異常に強いと申し上げたい。

余談ですが彼らの文字の歴史もまさにそうでした。中国の漢字を自己流に変形してもとの形から程遠い音と意味を作り出していますのはもしかしたら植民地の経験と言うよりももって生まれた遺伝子なのかもしれません。加えて植民地の亡霊ですからなんでも自分でやりたがるベトナム人の性格は一生直らないののかもしれません。皆さんの職場、工場でベトナム人が皆さんの指示通りではないことをやって腹を立てることが良くあると思えますがこれはベトナム人の遺伝子と思って少しは大目に見てやって下さい。決して悪気でやっているのではなく創意工夫の現われと考えるとやってください。

二つ目の亡霊は華僑の存在です。植民地の亡霊と常にペアで出てきます。これはどういう事かと申し上げますと、華僑には商売をさせたくない、ベトナム人のみにビジネスチャンスを与えたいと言う強い意志が政策に反映されます。そして真面目にきちんとやろうとする他の外国人も同じように排斥される可能性が強くなります。そしてすべて自分の手でやろうと考えます。

実はこの二つの亡霊に悩まされて政治・経済の政策が歪んでしまった国が身近にあります。それはインドネシアです。インドネシアはブルブミ政策と言いましてインドネシア人にだけにビジネスチャンスを与えようと様々な法律や行政指導を行ってきました。最初からインドネシア人にお金はあるはずがありません又商売のやり方もわかりません。そこで華僑は信頼できる正直なインドネシア人を見つけて表の顔にして政府から許可を取らせて実際には華僑が商売をするというやり方をしてきました。やがて時が過ぎ華僑もインドネシア人と同様の名前に変えて堂々と表の舞台にでてきました。そしてその結果はどうなったかと言いますと僅か3%の華僑に80%の経済を握られると言う具合にインドネシア政府が当初抱いていた思惑とは正反対の状況を生み出してしまいました。ベトナムも植民地の経験があり華僑がかなりベトナムの商流を握っていた時代がありましたからインドネシアと同様の素質を持っていると考えられます。



加えてインドネシアにはない三つ目の亡霊があります。それは共産主義の亡霊です。この亡霊は絶えず為政者や国民に対して「国民平等。貧富の差は出来るだけ少なく」とささやきつづけます。しかも苦しい戦いの末に勝ち取った自由、独立、平和そして平等です。そこには強いナショナリズムが内在しています。市場経済が深化すればするほど全体的には民度があがっていきませんが一方では貧富の差が激しくなっていく側面もあります。

さて国民も為政者も大金持が生まれていくことを許容するのでしょうか。財閥のような大きな経済組織が国としてではなく個人の中から生まれていくことを良しとするのでしょうか？三つ目の亡霊はなかなか厄介な代物と言わざるを得ません。

この三つの亡霊によって一つ目の課題であるベトナム式社会主義市場経済とはなにか、つまり「金持ちになって良い」とは明確に打ち出しにくい事や二つ目の産業構造再編も簡単に政策案は出てこないことも理解できるように思えるのですがいかがでしょうか。

#### <制度と精神>

さてこれまでお話してきましたようにベトナムは様々な問題を抱え込みながら近代化を押し進めようとしております。これからベトナムが近代化を行う上でどのような問題点があるのかをみてまいりたいと思います。

国の近代化には二つの大事なことがあると思います。制度と精神の二つです。ベトナムの近代化もこの二つのことを抜きにしては考えられません。

ベトナムの制度についてお話しますと、細かなことは省きますが、これまでは中央計画経済に向いていた行政の仕組み、経済の仕組み、金融の仕組み、税体系、企業経営の仕組みになっていましたからこれを市場経済に合った制度に変えていかねばなりません。

現在ベトナム政府では先ほどらいから申し上げているような様々な「歴史の後遺症」とか亡霊を抱えながら、ベトナムの事情に最も適した市場経済の形は何か？そしてその形に見合った制度は何か試行錯誤を繰り返しているところでもあります。我々からみると遅々として進まないと言う不満はありますがしかし「歴史の後遺症」や亡霊のことを考えますと精一杯の努力をしていると評価して良いと思います。

しかし制度だけを変えれば自動的に近代化が果たせるとベトナム人はどうやら考えている節があります。制度の改革の具体論については日本政府が大勢の専門家を動員して様々な角度から調査をしておりますので早晚立派な提言が出されると思いますので、今日はベトナム人が気づいていない「制度と精神」のその精神の部分に焦点を当ててお話ししたいと思います。

司馬遼太郎さんが面白いことをおっしゃっていました。「ある国が経済発展するかどうかはその国の人々を支えている精神的なバックボーンが何かで決まってしまうのではないか。マックウェーバーはヨーロッパで資本主義が発展したのはプロテスタントの興隆が多いに関係している。日本が資本主義をうまくやれたのは武士道の精神があったからではないか」というのが趣旨であったと記憶しております。武士道ではすべて良いこと悪いことは自分で判断することになっている。他人がいくら「あなたは悪い事はしていない。世の中が悪いのだ」と説得しても武士は「あれは私の不始末。私の生きる美学に反する」といつて腹を掻き切ったという禁欲主義の極致ともいえる精神が柱となっていました。日本人はどうも小さいときから良い悪いは自分で判断するように親から代々教え込まれてきたように思います。他人がみていようがいまいが作法はしっかり守ると言う世界がある、懺悔の仕組みにはどうもなじまないように出来ていると思うのです。

武士道は確かに自己規律という面では資本主義にとって便利な精神だと思えますが、経済の世界で考えますと私には江戸時代に商人の仲間内で流行った「石門心学」が現代の企業人にもかなり影響しているのではないかという気がします。

そこで近代化における「制度と精神」の関係を理解するために江戸時代に出来上がった「石門心学」のことをちょっとお話させていただきます。

「石門心学」は儒教の一派朱子学の流れをくんだちょっとした商人哲学とあって良いと思うのですが「土農工商」の時代で一番下層に置かれていた当時の商人の間で広く学ばれていた学問です。テレビや映画では廻船問屋の井筒屋とかいう御用商人が悪いお奉行と結託して悪事を働く場面がよく出てきますから江戸時代の商人はみな金もうけばかりを考えていた悪い人間の代名詞のように思われている方が多いのですが、大多数は勉強家でかなりしっかりした人生観をもって生きていた人々であったと言われていています。社会的にはたしかに最下層に位置づけられてはいましたが実際には読み書き算盤ができ商品知識も世の中の動きも一番良く知る立場に合った当時の商人達は知識階級の一角にいた人々でありました。

そんな彼らが生活の規範とか心の拠り所を求め「石門心学」にたどり着いたと言うのは自然の流れと言えます。それでは「石門心学」でどんな事が教えとして書かれているかと言えば「商人とは本物と偽者を見分ける力を持っていなければならない」とか「奉公人、家族を大事にしなければならない」といったことなのですがその中で特に注目したいのは「商人は贅沢をしてはいけません。食事は一汁一菜を常とし儲けたお金は社会に還元しなければならない。」と教えているくだりがあります。しかもこのような教えはやがて豪商と呼ばれる商家にそれぞれ家訓の形で残されることになり百年二百年と子々孫々に脈々と伝えられてきました。武士に「武士道」があったように商人にも「商人道」といってもよい「石門心学」が日本に生まれたというのは日本人として多いに誇って良いことだと思います。

実はちょうど日本に「石門心学」がはやっていたと同じ時代にヨーロッパでは資本主義の芽が出始めていました。それまでのカソリック教徒に変わってプロテスタントが増えたことにより資本主義の原形が出来上がった時代でありました。カソリックは神との契約は神父さんを通じて行います。少々悪いことをしても懺悔の仕組みがありますから大概のことは許されました。そして教会に集まり相互扶助の精神で助け合いました。お金を貸しても利子をとることはめったにありませんでした。やさしい宗教と言えます。しかしプロテスタントは神との契約は直接行いますから良い悪いは自分で決めなければなりません。自己規律と言う面ではカソリックよりはるかに厳しいこととなります。そして質素に暮らし汗水流して一生懸命働くことが神へ近づく一番の近道と教えられますから毎日夜が明けぬ内から起き出して仕事に精を出します。ドアの取っ手を気が違ったようにぴかぴかに磨き上げたりする人々が増えてきました。その代わりお金を貸したらしっかりと利子をとりました。一生懸命働きそして質素に暮らせばどうなるかといえば自然と金持ちになっていきます。これがマックス・ウェバーが「キリスト教と資本主義の倫理」という本の中でプロテスタントの倫理観が資本主義の精神にふさわしく資本主義の勃興の精神的なバックボーンになっていったと述べていることであります。

「石門心学」もマックスウェバーが言う「プロテスタントの倫理」も共通していることは宗教の要素を除けばともに「質素に暮らし、汗水流して一生懸命働く」という禁欲主義という部分ではまったく同じでありそして両方とも資本主義を支える精神的なバックボーンとしては極めて有効であったことです。

「停滞するアジア」とこき下ろされたアジアの中で日本が世界の経済大国になったことは偶然ではなかったのです。明治維新の遙か前から日本にはすでに資本主義の精神的な土壌

がしっかりと作り上げられていた、そして明治維新後に制度を西洋式に変えたときにそれが見事に花開いたと言えます。明治には素晴らしい企業人が数多く輩出しております。そして彼らが今日の日本経済の原形を作り上げました。もっともその伝統をしっかり受け継いでいたならば日本経済もあんなバブル経済は起きなかったのでしょうか、日本は戦争に負けた後遺症なののでしょうか、アメリカ資本主義の悪いところだけ受け継いでしまったとしか言いようがありません。いずれにしても申し上げたいことは制度をいくら立派にしてもそれを動かすのは人間でありますから精神がしっかりしていなければ制度は生かされないということであります。

それではベトナムではどういうことになるのか？

それについてはベトナム人自身が面白いことを述べています。毎年2月頃に旧正月テトを迎えますがベトナムの新聞が「テトを前にしてベトナム人がベトナム人を批評する」と題したコラムを作りまして大勢の方のコメントが載せられました。高名な経済学の教授や弁護士、企業人等などのかたがたが様々な形でベトナム人を自ら反省し批判するコメントを出しました。例えば「ベトナム人には道德心がない」「ベトナム人同士で相手を信用しない」とか驚くほど率直にみずからを批判していたのですが、そのなかで経済学の教授は「我々は争乱が長かったため平和な時にじっくりと経済運営をやったりすることが出来なかった。このため商人階級を育てる時間を過去に持てなかった。したがって金もうけのうまい人間はいくらでもいるが本物の商人はいない。」といった趣旨の一文を載せていました。ここでも私は「自分の欠点を客観的に見つめることの出来る」ベトナム人に驚嘆せざるを得ません。私の経験から申し上げて残念ながらこのベトナムの経済学者のおっしゃる通りだと思います。しかし、それほど卑下するほどのことでもないかなと思います。その辺のことを儒教精神と経済発展という関係を通して見てみたいと思います。

### < 儒教精神と経済発展 >

ベトナム人は私たち日本人と極めて近い民族でいくつかの共通項をもっております、「お箸をつかう文化」「大乘仏教の世界」「儒教精神に洗われた社会」「蒙古斑点の赤子」とすくなくとも**四つの共通項**が挙げられます。そのなかでも生活の規範が儒教精神に支えられていることはベトナム式の市場経済を作り上げる上でプラスの要素として働くと思われまます。厳密に申し上げれば日本は儒教精神をそれほど深く取り入れなかったから国の形をいともたやすく打ち壊して明治維新をやり遂げ結果として今日の経済発展があると言えます。ベトナムは韓国や中国と同様に日本に比べて強く儒教精神に洗われましたので結局は形にとられすぎて簡単には新しいものを取り入れることが出来ない体質をもっていました。そのため列強に押し寄せられて国が植民地化されようといった大事な時期に自らをすばやく変えることが出来ずに結局は列強の思うがままに流されていったという気がするのです。しかし出発点では遅れましたが今は自らの力で経済運営を行え得る環境になりましたので後はどのようにして商人の世界といえますか市場経済を作るかという課題に立ち向かう状況下では「儒教精神」というのは逆に極めて有効に働くと思うのです。

商売人の世界だけで申し上げれば儒教文化圏の人々の方が「自己規律」という部分は、儒教文化に染まっていない国や地域の人々に比べ相当根強く刷り込まれているように思います。この「自己規律」というのは商行為を行う上では欠かせません。国の経済発展を考えた場合ベトナム人の一人や二人に「自己規律」があるていどなければ国の大きな発展は期待できません。

国民全体の心の底流に流れている精神に自己規律があるかどうかが問題です。

ベトナム人はある程度それをもっていると思うのです。しかし正直に申し上げて、我々は長いことベトナム人と商売をしていますのでいろいろ問題を抱えております。腹の立つこともあります。とんでもない悪い人間も少なからずおります。しかしそれ以上に真面目に一生懸命働いている人間が大勢おります。そして大概そのような真面目な人々と言うのは国から保護が受け難い民間の企業の人々に多いように思えます。彼らがベトナム経済の主役になっていけばしっかりした市場が生まれてくると思います。ただ残念ながら主役になれるような制度になっていないというのが現状です。

ベトナム人やベトナムの国を一言で言えば

「看板は社会主義ですが、ベトナム人の血の中には資本主義の血が流れている。暮らしている社会はゲマインシャフトの世界。そして生活の規範は儒教精神に支えられている。」と言ったことになるのでしょうか。大変複雑な社会です。しかも資本主義の血と言いましたがどうも今のところ本物ではありません。どんな手段でもいいから金をつかみたい。人より余計に金を儲けたいと言う商人としては偽者の血です。しかし制度が出来ればやがてその制度の中でベトナム人独特の商人道を自ら作りあげていく素質は十分にもっている民族だと思います。又、伝統的に「読み書きソロバン」を生活するための基礎要素としており読み書きソロバンの優れた人を尊敬するという社会構造になっています。加えて勤勉で強い向上心、激しい競争心を持っております。いったん、市場経済の仕組みが出来上がればアジアの中でも有数な経済大国になる可能性が十分にあります。

本日は取り止めのない話を長々としてしまいました。皆さんのベトナムの国や人を見る目がすこしでも良い方向に変わってくれることを期待して終わりたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

—おわり—